ナチス・ドイツの収穫感謝祭

——ナチスのプロパガンダに民俗イヴェントの源流をさぐる——

河野　眞

Abstract

The present paper deals with the Harvest Thanksgiving Fair held by the Nazis. This event introduced by them as one of some new national holidays in 1933, just after they came into power, was one of the biggest and most successful examples among many of their 'propaganda' performances. Its importance lay not only in that it was their official fair in comparison with the well-known party (therefore private completely) meeting in Nürnberg, but also its enormous scale — about 700 thousand people in total (500 thousand peasants and 20 thousand other participants consisting of many delegations of various national groups, Nazi organizations and foreign diplomat etc.), assembled at the Bückeberg hill near Hameln (Niedersachsen), famous for big meetings of farmers — the climax was the speech by Adolf Hitler, who emphasized the significance of the farmer to the German national solidarity. In addition the same splendid ceremony also took place for several decades in German towns, the most important of which was the big event held in Berlin.

The proper outlines how this 'folklore' event took place on the basis of contemporary documents, mainly from reports about the big ceremony held on October 1st 1933 that appeared in the "Völkischer Beobachter", the official newspaper of Nazis party. Then, the background history of German Harvest Thanksgiving Fair is analysed, as well as it is importance in German Folklore since the Roman School and power relations of the Nazi Party.

目 次

(1) ナチス・ドイツのプロパガンダ
[1] フォークロリズムの観点からイヴェントを振り返る
[2] ナチス・ドイツにおける収穫感謝祭の位置
(2) 1933年の収穫感謝祭をナチ党機関紙に読む
ナチ党機関紙「フェルキッシャー・ベオバハター」(第276号，1933年10月3日付，北ドイツ版，本紙面および特集誌面）の記事から
「首都の収穫感謝祭 — 都市と農村は結びついた」
「若きドイツ収穫感謝祭を祝う — 血と土から新たな国家が育つ — 世界最大の農民集会／ビュッケベルクの感動的光景／70万人が結集したマンモス集会」
「総統と共にビュッケベルクへ」
「総統，ハノーファーで歓迎を受ける」
ヒトラーのビュッケベルクでの演説全文（省略）
ダレーの演説全文（省略）
ゲッベルスの演説「ドイツの歴史における最大の農民解放が始まった」（省略）
「ビュッケベルクに列席した各国外交官の顔ぶれ」
「国家（ライヒ）を覆う収穫感謝祭 — 全ドイツが耳を傾けたビュッケベルクの大農民集会」
「各地の催し — ケルン／アーヘン／ボン／ハンブルク／ポメルン郡／ヴッパータール／ブレスラウ／オーバーシレジア／ドレスデン／ケームニッツ／ハレ／ミュンヒェン／シュトットガルト」
「ライン各地で収穫感謝祭とライン祭りが催される／ローゼンベルクの演説（省略）」
「世襲農地法」
［ドイツ文学の歴史における農民］省略
［ドイツの植民地作家］省略
(3) ナチス・ドイツの収穫感謝祭の構造・背景・注目すべき諸点
[1] 推進者，および現実の核としての農業政策
[2] ナチ党の組織と権力関係
[3] 民俗思想との関係 —〈農民〉という概念
[4] 背景としての民俗学 — 収穫感謝祭を特別視してきた系譜
[5] キリスト教会との関係
[6] ナチス・ドイツの収穫感謝祭のその後の行方

(1) ナチス・ドイツのプロパガンダ

[1] フォークロリズムの観点からイヴェントを振り返る

穀物の収穫は直接的には，社会的・経済的なできごとである。またその定期的な波動が社会制度の契機となっているという点からみれば，政治的な事象とも重なって行く。作物を育て収穫にいたる過程が生命と生業の神秘にふれるという点では，宗教も密接である。さらにその行為が伝統的な儀礼と行事，すなわちドイツ語のSitte und Brauchの一項目であるという側面からみると，文化人類学や民俗学の対象でもある。こういう大仰な言い方をするのは，収穫行事が西洋社会においてもってきた意味合いに注目してみたかったからである。ちなみに日

本でも西洋の民俗が紹介されることがあるが，収穫行事の特別の意味に注意をはらっているものはほとんどみあたらない。実際には，この行事は西洋社会では特異な位置を占めてきた。しかしその特異性は，行事そのものが古い時代から比重を占めてきたことに尽きるのではない。むしろ近代になって民俗行事の知識が高まるなかで特別な意味付与がなされ，ことさら脚光を浴びるようなったという屈折した経緯の故である。

民俗学については，一般には伝統的な生活スタイルや行事をあつかうというイメージが流布している。それは決して間違ってはいないが，それとならんで今日しばしば問題になるものに，民俗知識の逆流という現象がある。すなわち民俗学が解明した筋道や，時には仮説までが，民俗行事の担い手に還流し，それが原因になって現実の民俗行事に影響が出るという事態である。しかもそれは，今日，決して珍しいものではない。民俗行事が，（日本で言えば）頭屋や寄り合いや各種の講といった伝統的な組織から今日一般的にみられる保存会や奉賛会といった名称の組織に変化したことなども，その変化を映しているところがある。すなわち，古くからのしきたりをひたすら持ち伝えるという脈絡に終始するのでなく，行事の文化財としての意味が意識されるのであり，その意識に裏付けを伴って実行されるのである。

現代の民俗学は，そうした逆流現象を把握することにも注意を払ってきた。アメリカのリチャード・R.・ドーソンが〈フェイクロア〉の術語を作って，伝統を踏襲した民俗のあり方とは違って，人為的に構成された偽物の（fake）民俗を指摘したのは，そうした留意の第一段階であった。[1] 次いでそれよりも幾分進んだ認識としてドイツの民俗学界で〈フォークロリズム〉の概念が提唱された。1960年代の西ドイツにおいて現代の民俗現象を理解するにあたって案出された種々の概念装置のひとつであった。[2] その要点は，民俗行事や民俗事象が〈本来それが定着していた場所の外で，新しい機能を持ち，また新しい目的のために演出されること〉を指している。あるいは〈民俗文化の第二次的な（セカンド・ハンドによる）受け継ぎと演出〉というまとめ方もされる。たとえば，当時，提唱者たちが挙げた例で言えば，〈最新のオートクチュールに古い荷車の車輪をとりあわせてショーウィンドに飾る〉のがそれであり，また〈革新政党がそのデモ隊の先頭に民俗衣装の一団を歩ませて，その政党が伝統を大切にすることを訴える〉のもそうである。要するに今日ではほとんど日常化してしまった観さえある文化的パフォーマンスの形態に他ならない。しかも注目すべきことに，そうした趨勢が問題になるときには，その原点として決まって顧られてきた現代史のエポックがあった。ナチス・ドイツの文化政策である。なかでもその巨大なマスターピースとして長く風評が絶えなかったのが，ビュッケベルクの収穫感謝祭であった。事実，北ドイツのニーダーザクセン州の丘で繰り広げられたその民俗イヴェントは，ナチス・ドイツが挙行した数々の祭儀のなかでも群を抜いていた。その一日の主会場の参加者の数だけでも50万人とも70万人に達したとも伝えられている。のみならず，主会場での祭典に加えて，首都ベルリンをはじめドイツ各地で同じ時刻に規模の大きな祭典が平行して行なわれたのであった。

今日，伝統行事を取り入れた種々のイヴェントが世界の各地で企画され，時に人気を呼んでいるが，そうした民俗行事の要素の効果に早い時期に着目し，絶大な効果を得たのがこの盛儀であった。もし善悪や価値判断を度外視して言えば，ナチス・ドイツは，民俗行事をイヴェントとして演出することにおいては開拓者の位置に立っている。またその後のどんな演出者もナチス・ドイツほど大きな成功を手にしていないと思われるほどである。なかには今日につながっている行事も少なくない。その分かりやすい例は町の広場などに立てられる巨大なクリスマス・ツリーであろう。ナチス・ドイツは毎年クリスマスの時期には，年ごとに違った地方を順番に指定した。指定された地方は，森から一本の大木を切り出して首都のベルリンに搬送した。その大木は〈生命の樹〉と称されて，クリスマス・ツリーと類似の飾り付けをほどこされ，ナチ党本部前の広場に立てられた。広場の大クリスマス・ツリーの起源は20世紀始めのニューヨークのマジソン・スクエアであるが，今日のように広まったのには，ナチ時代の演出が一定の役割を果たしている。

ナチス・ドイツが宣伝活動において異常な才覚を発揮したことはよく知られている。出回って程なかったラジオを通じての政治活動にいちはやく進出したことは伝説的になっており，〈ラジオなくしてヒトラーなし〉と評されたりする。同じく映画の活用にも目端がきき，その余波は最近もレニ・リーフェンシュタールの数奇な生涯と重なってマスコミを賑わわせている。さらに国民に平均年収の購買力の範囲で手が届く大衆車の開発を約束して〈フォルクスワーゲン〉の名称を冠したが，巧みな命名の故というべきか，ナチス・ドイツの発案という汚点も意に介さず，そのブランド名は世界中を駆け巡っている。電器冷蔵庫が日常生活に定着したのも，ナチス政権の初期にみられた民生政策の一環であった。もちろんそこには政権と党利への巧妙な計算もはたらいてはいた。実際，電器冷蔵庫は自動車のばあいのような空約束では終わらず，ある程度の広まりをみせたが，その普及促進に向けたスローガンはなかなかのものであった。曰く，〈腐敗とのたたかい〉。[3)]

[2] ナチス・ドイツにおける収穫感謝祭の位置

ナチス・ドイツのイヴェントと言えば，よく話題になるのはニュルンベルクでの党大会である。しかしそれに勝るとも劣らない規模のイヴェントとして収穫感謝祭がおこなわれていたことは，日本のナチズム研究においてはあまり知られていないようである。両者は基本的な性格において共通している。しかし同時に多少の差違もあった。共通点としては，どちらも祭礼国家としてのナチス・ドイツのイヴェントであり，そのなかでも特に規模の大きいものであった。その演出の実際においては共通性が濃厚である。たしかに党大会がはるかに知られているが，実際にはナチス・ドイツは，党大会とおなじ位の熱意で他にも幾つかの儀式をおこなっていた。しかもそれらのなかには国家の祝祭という意味では，いわば身内の儀式である党大会よりも，ランクが上のものすらあった。5月1日の国民の労働祝日がそうであり，

2) フォークロリズムについては次を拙論を参照，「フォークロリズムからみた今日の民俗文化」(「三河民俗」3号，平成4年所収)。

3) 〈Kampf dem Verderb!〉のキャッチ・フレーズについては，オーヴン，冷蔵庫，洗濯機をあつかったハンブルク労働博物館の展示企画のカタログを参照，*"Das Paradies kommt wieder . . . Zur Kulturgeschichte und Ökologie von Herd, Kühlschrank und Waschmaschine"*, hrsg. vom Museum der Arbeit. Hamburg 1993.

4) この年は9月30日（日曜）に挙行され，全国から集まった農民代表への表彰式が中心であった。ヨーゼフ・ゲッベルス宣伝相，ヘルベルト・バッケ農業相，そしてアルフレート・ローゼンベルクが表面に出て祭典を取り仕切った。参照，ナチ党機関紙「フェルキッシャー・ベオバハター」1944年10月1日号。

(2) 1933年の収穫感謝祭をナチ党機関紙に読む

ナチ党機関紙「フェルキッシャー・ベオバハター」(„Völkischer Beobachter“) の報道から（1933年10月3日付，北ドイツ版，本紙面および特集誌面）

[本紙第1面]

首都の収穫感謝祭

ベルリンでの祭りの様子　　どこでも大群集が麦穂のしるし

ベルリン　10月2日

日曜日に50万人のドイツ農民がビュッケベルクに到着したことを告げるトランペットが鳴り渡ったころ，ベルリンでも市内の多数の会場に何千・何万の人々が集まった。親衛隊，突撃隊，ヒットラー・ユーゲント，学生団体，職業団体，各種の協会と団体が，ベルリン市内の14の会場に向けて行進を開始した。

首都の大いなる一日は，農民を乗せた15機の飛行機がテンペルホーフ空港に到着したことによって始まった。農民代表団は，各省庁の代表者や首都ならびに各地区宣伝担当者に迎えられた後，花で飾った自動車に載って，総統の歓迎を受けるために首相官邸に向かった。歓迎会は昼食会を含んでおこなわれ，その後，正午前に客たちは，ふたたび飛行機でベルリンを離れて，ビュッケベルクの会場へ飛んだ。

★

午前中にはこれ以外にも，ベルリンにとって特別の来客としてブランデンブルクから多数の農民代表団が訪れた。彼らは市役所で迎えられ，同じく昼食会に招かれた後，車でルストガルテンに向かい，そこで国家農民指導者ダレーと国家宣伝相ゲッベルス博士から名誉表彰状を授与された。このルストガルテンでの催しは，同じ時刻にベルリンのもう13個所でおこなわれた行事のなかで最大であった。

これらすべての集会の会場では先立ってミサがおこなわれ，次いで農民代表団が迎え入れら

れた。そして都市民と農民のあいだで会話が交された後，この日の偉大な意義についての解説が行われた。続いて，ビュッケベルクから総統の演説のラジオでの中継放送があった。同時刻にはまたベルリンの多くの場所での集会の中心として，グリューネヴァルト・シュタディオンで大規模な集会がおこなわれた。参加者は夜遅くまでシュタディオンの大きな円形会場に集まって，演説に耳を傾けた。最後は祝祭劇「パンと鉄」が上演されたが，これはベルリン地区宣伝隊の組織能力の精華であった。

都市と農村は結びついた

次いで，総統が農民の代表者に感謝の演説をおこなった。

ドイツ農民の代表者が今日ここに集まり，代表団を組んでここに来られたという事実が，ドイツにおいて運命の転換が起きたことを，農民諸賢に知らしめている。農民諸賢には，今日の国家（ライヒ）政府を支配している精神が過去15年の政府の思想とは異なることは，明瞭であろう。我々は根無し草ではなく，フォルクに疎遠な存在でもない。逆であり，我々はドイツの土地に結びついており，それを感得している。我々は，ドイツの土地に依拠している。それはすなわちドイツの農民に依拠していることである。ドイツ農民は，ひとつの身分（シュタント）ではない。ドイツの生命力の代表であり，それゆえドイツの未来の代表である。我々は，ドイツ農民にナショナルな豊饒力の源を見る。我々のナショナルな生き方の土台を見る。難局において，正に難局なればこそ，我々がドイツ農民に与することを，ドイツの農民諸賢には確信していただきたい。私は諸賢に感謝する。諸賢が村にありながら，都市が多大の困難にあることに思いを致しくれることに感謝する。

これによって都市民と農民の絆は一層強められるであろう。両者は団結して活力ある共同体（ゲマインシャフト）を築かねばならない。真正のフォルク共同体（ゲマインシャフト）は行動の上にしか樹立しない。それゆえ都市民諸賢には犠牲をいとわぬことをもとめたい。また農民諸賢には都市民の苦難と心痛を理解することを願いたい。諸賢が，我々の困窮を解決するために自発的に助力をさしのべたことに，お礼を申し上げる。我々は，自力によって，自己の資産によって，正に我らがフォルク自身のなかから，そして外部の助けを借りることなく，他人に依存することなく，困難を乗り越えつつある。これは我々の誇りである。我々が困難を打破するために我らの総力を結集するなら，必ずや幸いが到来する。それはドイツの都市民にだけではない。苦しみに直面している者だけにではない。困難の除去に助力する人々，ドイツ農民の上にも幸いは来るのである。

次に国家（ライヒ）農業大臣ダレーが各地方の農民代表を紹介し，彼らはまたそれぞれの団体を総統に紹介した。そのひとりひとりと総統は握手を交し，一人一人とまなざしを交した，誰もが総統の姿を注視した。彼らは，自分たちがドイツ農民であることを誇りに感じ，総統の前に立つことができたことを誇りにしている。次に農学士団体の議長クマー博士から，ビスマルクが使用した鷲鳥羽のペンが総統に贈呈された。そのペンは，ザクセンの森から切り出した樫材で作った高さ70cmの装飾付きの時代箪笥に収められている。このペンをドイツ帝

またこれからとりあげる収穫感謝祭がそうであった。もっともナチス・ドイツにおいては政権政党と公権力との混同がありはしたが，それでも収穫感謝祭は国家行事であり，党大会は政党の行事という区分は存在した。それは1939年の第二次世界大戦の勃発の後は，盛大な党大会はおこなわれなくなったのにたいして，収穫感謝祭の方は継続されたことにあらわれている。それどころか戦局が深刻化し非常時の様相が強まるにつれて，国家行事は放棄すべからざる意義を帯びていった。規模の点ではさすがに当初の盛儀を維持するべくもなかったが，この行事にたいするナチ党幹部の執着には相当なものがあった。事実，ほとんどの儀式が実行不能になった政権の崩壊寸前の1944年秋にも，空襲下のベルリンにおいて収穫感謝祭の行事はなお挙行されたのである。[4)]

またその儀式はヒトラーが主催する中央の式典だけでなく，同時に各地方でも挙行することが推奨された。そのための手引き書が作成されて大量に配布されたことも，党大会とは性格の異なるところであった。もっともそうは言っても，収穫感謝祭については，もうひとつ詳らかになしえないところがある。おそらくこの行事にもっとも関心を寄せてきたのはドイツの民俗学界であろう。しかしその分野においても，頻繁に言及されるわりには本格的な研究はなおなされていない。またそれらは必ずしもナチズム研究と言えるような性格でもない。さらにドイツの民俗文化の流れのなかに位置づけるという作業もなお未着手で，当時の資料だけが孤立して放置されており，またそれがなお最大の情報源という程度である。しかしともかくもそうした状況に刺激されて本稿は成ったのである。

今回の紹介で主に使用するのは，ナチ党の機関紙「フェルキッシャー・ベオバハター」の記事である。また補足的にはナチ党の関係機関から発行された民俗行事の宣伝ならびに演出指導のパンフレット類にも目を通してみた。資料への着目としては簡便に過ぎるかも知れないが，実際に読んでみると，この現代史の一齣に関する限り，当事者であったナチスの機関紙は，他の解説よりも当時の様子をまざまざと伝えており，また出来事の意味を解き明かす鍵に満ちているように思われた。特に今回は，このイヴェントの最初のものである1933年10月1日の模様に焦点を合わせ，特徴を考えてみようと思う。

イヴェントが集中的に報道されたのは，ナチ党機関紙「フェルキッシャー・ベオバハター」1933年10月3日号で，本紙に加えて特集にあたる2面の付録面を伴っている。なおここでは「フェルキッシャー・ベオバハター」の版のなかで，基準紙面である首都の「北ドイツ版」（後のベルリン版）を用いる。またイヴェントの経緯を追う趣旨から，コラムの順序は並べかえた。

注

1） 参照，リチャード・ドーソン『アメリカの民俗学』（岩崎美術社，原書はRichard Dorson, *American Folklore*. Chicago 1959）

国の建国者は，〈我らドイツ人は神を畏れる，さもなくば世界は無である〉の言葉を発したときに用いたのであった。

やがて3人の少女が進み出た。ブロンド髪のシレジアの乙女で，彼女たちは，ドイツの国家首相に，収穫の冠を差し出した。感動しつつ彼女たちは，つつましく言葉を紡ぐ。〈収穫の冠をこの度ほど熱い感謝と満腔の愛をもって編んだことはありません。それが今年のこの冠です。総統殿，貴方は，非常な困難から私たちを導いて下さっています。ローテンブルクの青年農民同盟の少女として，私はシレジアの農民団体からこの冠を贈ります。〉総統の前に立っているのはいかつい農夫たち，すなわち仕事に生きる男たちである。しかし男たちのなかには，この少女の言葉を聴いて，目に涙をうかべている者もいた。さらにもう一人の少女が収穫の冠を差し出し，古くから伝わる農民の格言を述べた。〈農民は主なる神を信ず！土地がその手にやすらうとき，農民たることは気高き恵みなり。水が襲うとも，嵐が騒ぐとも，土地は下にあり，空は上に存す。〉

農民の救い手にして，フォルクの総統かつ首相である人物にたいするハイルの呼号を挙げつつ，代表団は退席した。その後，総統を囲んで50台の自動車がベルリン市民の歓呼を浴びながら空港に向かった。10機の飛行機がハノーファーへ飛び，そこから祭典の場所に進むのである。すなわちビュッケベルクの式場へである。

ハーメルンへ出発

ベルリンで数百万人の市民が市内の各地で正午の祭典に集まってしている頃，総統はゲッベルス博士とダレーなどの大臣や国家新聞主任ディートリヒ博士その他の来賓と共に首相官邸で昼食をとった。ここで出されたのは，ドイツ全国の集会で出されたのとまったく同じ簡素な煮込み鍋（アイントプフ）である。

この後，総統は空港へ向かった。会場のビュッケベルクへ行くために，特別機でハノーファーの空港まで飛ぶのである。テンペルホーフ空港でも数千人の人々が総統を歓呼で見送った。こうして総統は副首相フォン・パーペン副首相，閣僚のゲッベルス博士とダレー，そしてフォン・ブロムベルク国防相を従えて空港に到着した。

ポツダムの祭典

ポツダム　10月2日

ポツダムとその近郊の夥しい人々が参加して「収穫の日」が祝われた。これは都市と農村の団結の強い表示であった。すべての教会堂でミサがおこなわれた後，バシン広場を出発した行列は何キロもの長さで街を行進した。

［本紙第2面］

若きドイツ収穫感謝祭を祝う

血と土から新たな国家が育つ

ドイツ全土が収穫感謝の日一色に　　世界最大の農民集会

ビュッケベルクの感動的光景　　70万人が結集したマンモス集会

ビュッケベルク　10月1日

ビュッケベルク山をヴェーザー谷が取り巻いている。山と丘がなだらかな起伏を描いて波を打ち，遠くに平和な村々の赤い屋根が喜ばしく輝き，鼠取り男の町の教会堂の塔が誇らしげに聳えている。広い谷には畑と果樹園と牧草地が色とりどりに配置され，草花が赤・青・黄・白と秋の日に季節の最後の輝きを放っている。

ビュッケベルク

午前7時半に最初の参加者が，まだ朝もやのかかっているビュッケベルクに到着した。さらにそれより数時間も前に屋台で商売をする人々が準備にかかったいた。国有地オーフェンで夜営した突撃隊員と親衛隊員と鉄兜団員併せて3万4千人，それにヒットラー・ユーゲント6千人がそれぞれの持ち場についたが，雛壇の前の草原が会場に変わったのはようやく昼食後であった。オールベルクが次第に靄のなかから姿をあらわした。見渡す限り，行進路を大勢の人々が隊列を組んで集まってきた。なかには鼓笛隊やブラスバンドと一緒の団体もあり，それぞれ旗を掲げている。デンデルン駅からは，行進曲が巨大なスピーカーで何キロも遠くまで響いている。午後1時になると，演壇がしつらえられた麓までの広い空間は歩兵部隊，突撃隊，親衛隊，鉄兜団の儀杖隊が陣取った。しかし行進行列はまだ見えない。

全国から集まった民俗衣装のグループ

軍隊がアトラクションを繰り広げることになる緑の草地を横切って2万人の突撃隊員がハーメルンからビュッケベルクまで人垣を作った。また総統がビュッケベルクの演壇へ上る土手の近くでは，道の両側にシャウムブルク，デトモルト，ビュッケベルク，ヴェストファーレンの人々が民俗衣装をまとい，ゼンゼ（［注］草刈り用の大鎌）ハルケ（［注］土や草をならす熊手），さらに穀物と果実でこしらえた飾り輪や飾り紐を携えて居並んだ。長さ150メートルの広い雛壇の前には，ドイツ各地からやってきた民俗衣装の男や女や子供たちが労働奉仕隊よりも前に進み出て勢揃いをした。色とりどりの衣装のなかには高価な仕立てのものも見受けられる。会場の中央には，麦藁の束，穀物，果樹を盛ったテーブルが据えられた。午後3時から，来賓を乗せた自動車が次々に到着した。会場の前列には，総統とその随員，それに

政府の高官のためのベンチが並んでいる。それに続いて各州の政府要人と農民代表，各国外交官と来賓が居並んだ。また会場中央の左右でも，前列には農民代表が座を占め，その後ろに内外の報道関係者がひしめいた。

あでやかな色彩の祭典

一大パレードがおこなわれたテンペルホーフやニュルンベルクとは対照的に，ビュッケベルクでひときわ目立ったのは多数の女性たちであった。各地の軍人会も昔の旗を掲げて現れた。その人々の中央にはやはり民俗衣装を着た夥しい数の男女が陣取り，あでやかな色彩のモザイクを作っている。そして莫蓙や折り畳み椅子にくつろいで座りながらも，周囲の偉観に目を丸くしたり，間断なく響く行進曲に聞き耳を入ったり，あるいは戦闘機の高度な編隊飛行や単独飛行に見とれている。戦闘機は，小さな落下傘のついた花束を投げて，人々を驚かせたのだった。

生命の山

天気にはいささか恵まれ過ぎた

気温は日陰でも29度に上り，猛烈な人いきれのために，ビュッケベルクのすぐ近くで14張のテントで待機していた衛生班がたびたび出動しなけければならなかった。飲料水の売り子のビンは奪い合うばかりであり，会場の周囲にタンク車が廻って来ると常に数百人の人だかりができた。山腹が人波に埋め尽くされて一寸の余地もなかたっただけでなく，行進路までが空き地どころか雑踏の観を呈した。さらに4千条の旗がたなびき，途方もない人の山であった。ビュッケベルク全山が生きて呼吸していたのである。

午後4時には，会場は立錐の余地もなかった。それでも押し寄せる人波は増える一方だった。概算ながら，少なくと70万人が集まったであろう。会場の様子は正に圧巻であった。会場を取り巻いて林立する旗のあいだを，標旗の列が雛壇に向かって行進した。同時に，陽光に輝くヴェーザー川の水面には，オール，パドレ，モーターボートの3種類の水上スポーツ団体がそれぞれ列を作って登場した。

外交官たちの入場

4時間を数分過ぎた頃，外交官の列が麓に到着した。その列は，総統を迎えるために作られた道の中央のステージの傍で止まり，左右に突撃隊の隊列が護衛についた。

外交官団は保安警察に伴われ，式典長フォン・バフゼヴィッツ伯，ならびに宣伝省送迎局参事官ムムと大臣官房長官オットが先導した。広場中央の土手がその通路であった。同時にフリースラント，ダンツィヒ，シュヴァルツヴァルト，バイエルン，シレジア，ライン地方（葡萄農家）などドイツ各地からの農民代表が色とりどりのお国自慢の衣装を着けて入場した。

政府参事官グッテラーによる
ベルリン＝ブランデンブルク突撃隊の祝辞の朗読

12万7千人の突撃隊の名前でドイツ農民に挨拶が送られた。祝賀文は第32旅団（ベルリン）指揮官より上級指揮官フィードラーに伝えられた。

ドイツの土に立つ農民諸氏への挨拶

ビュッケベルクに参集したドイツの農民にたいして信義ある紐帯による戦友の挨拶をおくる。我らベルリン・ブランデンブルク突撃隊グループ，すなわち褐色の軍隊は，ドイツの自由の戦士としてドイツ農民と分かち難く結ばれており，また大地の上に成りたつ職種の再興を強く願っている。貴地に派遣された上級指揮官リヒァルト・フィードラー麾下の突撃隊は今回の任務の名誉を認識しており，12万7千人の突撃隊の代表者としてドイツ農民の誉れの日にこれを全うせんと願うものである。

（声明はグループ指揮官にしてプロイセン国家参事官エルンストに署名によって署名された）

総統来る

5時を過ぎた直後，スピーカが，総統が交差点に到着したことを告げた。号令が轟き，騎兵連隊がかざすサーベルが輝いた。その向こうに総統と随員を乗せた自動車がゆっくりと走行する。第13騎兵連隊が土煙を上げてビュッケベルクに向かって下ってきた。

ビュッケベルクの麓で総統は自動車を下りた。総統が，儀杖隊，近衛歩兵，保安警察，突撃隊，親衛隊，鉄兜団，労働奉仕隊の前列に沿って歩むと，これら閲兵隊列のあいだに大歓声が湧き起こった。続いてハイルの谺が轟いた。総統は，どの方向にもおもむろにドイツ式の敬礼を送ったのち，ゆっくりと谷から山頂へ上った。するとそれに合わせて大歓声が沸き起こった。総統の後を，外務大臣ノイラート，法務大臣ギュルトナーまで含んだ国家の閣僚全員が続いた。最前列は食料農業相ダレー，国防相フォン・ブロムベルク，宣伝相ゲッベルス博士，各州の大臣，国家政務大臣のほとんど全員，国家官房長の面々，突撃隊と親衛隊の上級幹部が勢揃いし，官房長官のなかでは，ヒールが，古い農民帽に倣って労働奉仕隊のために最近作られた新しい帽子をかぶっているのが人目を惹いた。

やがて国家首相が演壇に姿をあらわすと，それを迎えて，全山を揺るがす高波のごときハイルの呼号が湧き起こり，山腹にこだました。各国の外交官と来賓（そのなかにはアウグスト・ヴィルヘルム公や国立劇場の劇作家ハンス・ヨーストもいたが）が挨拶を述べているあいだに，早くもファンファーレが5回鳴りわたって大砲が一列に並べられ，21発の祝砲が轟いた。

開始が約45分遅れたために，ヴェーザー谷にはすでに夕靄が薄くただよっていたが，それでもオーフェン国有地に陣取っていた第13騎兵連隊の騎馬行列は予定通りに進行した。蹄鉄の轟きが山頂にまでひびきわたった。騎兵中隊は速足ギャロップで方向を変えながら，ハーケンクロイツの形を作った。

この演技は盛大な拍手で迎えられた。締めくくりはやはり速足ギャロップでのパレードで，

これにもまた盛んな拍手がおくられた。その後，すべての楽団によって古くからの歌「人皆神に感謝せよ」が演奏され，それに合わせて参加者全員が帽子をとり起立してこの歌を合唱した。

炎の山

バーデンヴァイルの人々の行進が行われるなか，総統は随行員と各大臣と共に演壇を下り，各国外交官と来賓に挨拶をした後，中央の道を歩んだ。ふたたび会場の全体から大歓声が起きた。

ややあって演壇の傍からサーチライトの灯が照射され，まるで炎の舌でなめるように，大きな塔の赤い側壁を夕空に浮き上がった。野原を囲んで林立する旗が光りを浴び，無数の旗が作りなす森が血のように紅く燃えている。

不可思議な光に浮かびあがった無数の旗の広葉樹林はさながら魔法にかかったメルヒェンの森であった。遠くにはハーメルンの町の明り，そして村々のともし火が瞬いている。夜の帳はなお下りきっていない。ここで

国家食料農業大臣ダレーが演壇に立ち，

本紙に収録したような声明をおこなった。それは何度も嵐のような歓呼で中断を余儀なくされた。

総統の演説

そしていよいよ総統がマイクロフォンの前に進むと，改めて大歓呼の嵐が湧き起こった。しかもその嵐は国家首相が手を振るや水を打ったように静寂に変わり，そのなかで本紙に掲載した演説がなされた。

首相の演説が進むや，それは人々の絶えざる歓呼を誘わずにはおかなかった。そして「ホルスト・ヴェッセル・リーベ」の演奏とそれに合わせ全員の唱和による中断を経て，最後には軍隊トランペットの荘重な音色の伴奏が響くなか何十万という人々による「ドイツ国歌」の合唱に移っていった。

余韻

ビュッケベルクからハメルンまでの道筋には突撃隊員によって松明が点された。夜を貫いて光の帯がどこまでも延びている。筆舌に尽くせない昂揚のなかを総統はビュッケベルクを後にした。さまざまな色彩のマグネシウム電球がまばゆく輝き，地平の彼方まで光の海がひろがり，そのまんなかに雷鳴が轟くビュッケベルクにファイアストームの炎が燃えていた。オールベルクは背後から照明を受けて，次第に濃くなってきた霧のなかにシルエットのような姿をみせている。集まった大群集のなかには，10時間あるいはそれ以上を，この古きゲルマン

人の信奉の地で待機した者も少なくない。自分たちの指導者に会い，感謝し，崇めるためである。こうして魅力あふれる一日の終りは，すべての者に忘れがたい体験を得させたのである。

［特集第1面］

総統と共にビュッケベルクへ

偉大な一日を回顧　　総統の旅程に同行した本紙南ドイツ支局記者の報告

ベルリン　10月2日

ドイツの村々の上空

テンペルホーフ空港の中央滑走路に2機の飛行が，総統と帝国大臣らならびに同行をハノーファーへ送るために待機していた。昼の1時過ぎに最初の自動車数台が到着した。ドイツ農民の名誉の日に参加する国家の首脳陣である。

私たち同行記者の飛行機は，総統の飛行機よりも少し前に離陸した。眼下には陽光を浴びたベルリンの屋根屋根とハーケンクロイツ（鉤十字）旗の輝きが見えた。この首都の印象を最後に私たちは目的地へ向かった。すなわちドイツ農民の祭儀へである。眼下に広がる農地や村や畑や森は，私たちがその記念日を祝うことになるドイツの力とドイツの目覚めのシンフォニーになった。飛行は順調で，きちんと1時間25分で，秋の雲間の下にハノーファーの町が浮かび上がった。そこから先は自動車である。

総統を待ち受けるハノーファー

ハノーファーでは，無数の人々が総統を待ち受けていた。私たちは，総統の車よりも30分早く出発して，60キロメートル離れたハーメルンへ向かった。

ニーダーザクセンの村々が総統を迎える熱狂ぶり

どの村でも家々には飾りがなされている。戸口や窓には，収穫感謝のしるしに畑の作物が積み上げられている。

玄関前には村々の老人が立っている ― 若者たちは全員ビュッケベルクに集まっている。

勤労と生活によってきたえられた人間を目にするところではどこででも，彼らが，苦難と失墜を克服して真の意味で彼らのふるさとを救い出した人間を，彼らがどれほど誇りと希望にみちた喜びをもって待ち受けているかが分かる。

いくらか大きい村であれば必ず沿道の両側に幾百人，幾千人という人々が迎えにでている。それは目的地に近くなればなるほど，出迎えの人波は増してゆく。彼らはすでに数時間も総統を待っている。これらの人々が総統を迎えるにあたっての畏敬と興奮は想像を絶するもの

がある。それが求めていた通りの勝利であることは疑いを容れない。

ビュッケベルク

ヴェーザー連峰の鋭い輪郭は遠目にも明らかであるが，やがてビュッケベルクが見えてくる。波を打つおびただしい旗の巨大な長方形があり，気高い丘がそそり立つ。さらに近づくと，秋の陽のなかでその長方形が膨大な数の人間から成っていることが分かる。遠くからでも音楽隊の演奏が響いてくる。沿道には何キロメートルにもわたって親衛隊員が列を作り，その列の向こうには総統を何千もの人々が待ち受けている。

陽が沈みはじめ，夕陽に赤々と映えるヴェーザー連峰が雄大な景観をみせるなかを，総統の車は歓呼する人垣のあいだをおもむろに進んでゆく。

総統は儀杖兵を閲兵したあと，中央に広くあけられた通路をゆっくり歩む。歩みが丘を登るごとに，眺望の広がりは増してゆく。遥かな景観は，沈みゆく夕陽の光線を受けて黄金に燃え，メルヒェンさながらのたたずまいを足下にひろげている。どんな言葉でも言い表わせない感銘深い光景，ふるさとへの愛，土への愛，この清らかな時間を共にして感動にふるえている人々への愛の正にシンボルである。

ここで騎馬者の演技があった後，総統は再びゆっくりと丘を下りて，ビュッケベルクの麓に設けられた演説台に立った。夕闇は濃くなり，明りが点された。人々山の上揺れて丘の輪郭をなぞって浮かび上がる旗の列は，この世のものならぬたたずまいである。

最初に農民指導者ダレーが，そして次に総統自身が演説をおこなった。数万人の心臓を嵐のなかにつかまえるその演説のあいだに，ビュッケベルクの黒い尾根の彼方に月が昇り，ドイツ農民をあらたな生命にうながす力強い告知に魔法の光を注いでいた。

総統は語りつづけ，民族の運命と農民の運命との決して解けることのない結びつきを強調すると，その言葉は感動の谺の解き放った。それはドイツ農民が総統に返した感謝にほかならない。なぜなら総統は間一髪のところで舵を握って，農民とドイツを没落から救い出したのだから。

ドイツ国歌が夜の空に響きわたった。それはドイツの国土の谷や山を越えゆき，またすべてのドイツ人の心に高鳴りを立てた。そこには都市民か農民かといった区分はない。頭脳労働者と肉体労働者の違いもない。ドイツはひとつである。これが，かのニーダーザクセンの農村地域でのファンタスティックなひとときの信条である。

閉幕

ビュッケベルクへの行進路に参集した大群集のあいだを自動車は進んでゆく。夜の闇のいたるところに，挨拶を交わす農民の姿がある。私たちの背後では，ビュッケベルクに光の列が浮かんでいる。私たちはヴェーザー川を渡っているのに合わせて，数百艘の舟がゆっくりと，

光の海さながらに近づいてくる。そうこうする間に，ビュッケベルクの頂では，幾つもの巨大なたき火が燃え上がった。地平線に一塊の山の輪郭が浮かびあがり，その灯火は空を真昼のように照らし出している。新たに昂揚するドイツの未来ののろしとして，雄大な自然が，ドイツの歴史がかつて目にした最も偉大な一日を締めくくる。

総統，ハノーファーで歓迎を受ける　　***総統　百歳の老女をねぎらう***

午後3時にハノファーの空港に降り立った総統への歓迎は特に心のこもったものだった。州長官ルッツと市長のメンゲ博士が出迎え，また多数の親衛隊員と突撃隊員が特別隊としてこれに参加した。

なお総統が到着した直後，3人のヒトラー青年隊員が感激して警戒線を破って総統に花束を手渡すという出来事があった。総統はにこやかに微笑みつつ礼を言って受け取った。

総統の到着のわずかに先立って，歴史的な衣装をまとった大勢の農民からなる幾つかの代表団がやはり飛行機で到着した。そのなかにはダンツィヒから来た農民もまじっていたが，これらの代表団たちは感激して総統を表敬した。空港には14機の飛行機が整然と並び，そのうちの3機は大型機であった。現代的な飛行機の前で昔ながらの衣装をまとった農民たちが整列する様はまことに興味深い光景であった。古き時代と新しい時代の出会いであった。

見物人のなかに，新しいドイツの指導者に一目会いたいと願ってやってきたハノーファーの102歳の女性がいた。そこで第102オートバイ隊の隊長シェーリング党員が彼女を総統に紹介した。総統は，心身ともに驚くほど丈夫なこの民衆同胞とちょっと言葉を交した。感激する老婆を，親衛隊員たちが自宅まで送った。彼女の望みは叶えられたのである。多くの政権が成っては消えてゆくのを見てきた彼女は，老境においてドイツを新生させた人物と握手を交し，その目をみつめることができたのである。

ハノーファーからビュッケベルクまでの60キロメートルの沿道には，親衛隊員と突撃隊員が列を組んで，通り過ぎる総統の車にたいして手を挙げ，ハイルを歓呼した。

ヒトラーのビュッケベルクでの演説全文（省略）
ダレーの演説全文（省略）
ゲッベルスの演説全文（省略）

［写真］ビュッケベルクでのドイツ農民の祝日：特別演台に立つ総統。総統の右はダレー国家（ライヒ）農民指揮者・国家（ライヒ）農業相，総統の後はフォン・パーペン副首相，総統の左は国防相ブロムベルク元帥，文化相ルスト，宣伝相ゲッベルス博士

ビュッケベルクに列席した各国外交官の顔ぶれ

ビュッケベルクの収穫感謝祭には以下の23カ国の外交官が，多くは夫人同伴で列席した。

日本帝国：大使　永井

ユーゴスラヴィア王国：公使　バルジッチ

チリ：公使　デ・ポルト＝セグロ

ボリヴィア：公使　D. アンジェ＝ソリア

エジプト王国：公使　ハッサン・ラハト　パシャ

ブルガリア王国：公使　Dr. ポーメナフ

ベルギー王国：公使　ド・ロショヴェ・ド・デンエルゲム

ルーマニア王国：公使　コムネン

チェコスロヴァキア：公使　マストニー

アルゼンチン：公使　Dr. ラヴーグレ

スイス：公使　デニチェール

メキシコ：公使　エアンヘス・メホラーダ

オーストリア：公使　タウシッツ

ギリシア：公使　リソ＝ナウガベ

アイルランド自由連合：公使　ブリー

グアテマラ：代理公使　ディアス

イタリア王国・代理公使　テルッチ

コロンビア：代理公使　Dr. トレス＝ウマナ

ウルグァイ：代理公使　ブエロ

アフガニスタン王国：代理公使　ムハンマド・イズマイール・カーン

ブラジル：代理公使　デ・スセ＝カルテン

オランダ王国：代理公使　Dr. デ・フォス・ヴァン・ステーンミーク

ニカラグア：代理公使　アレンハ・ガルシア

［特集第1面］

国（ライヒ）を覆う収穫感謝祭

全ドイツが実況放送に耳を傾けたビュッケベルクの大農民集会

血と土の国家

ビュッケベルク　10月2日

歴史的意義の一日は終わった。それはドイツ農民の歴史とむすびついた一日であった。ドイ

ツ農民ははじめて血と土に思いをいたすことをうながされた。ドイツ農民のこの名誉の日は，また新生ドイツの輝かしい告知であり，またその指導者への忠誠宣誓の表明であった。50万人のドイツ農民と約20万人のドイツ全域からの参加者が日曜にビュッケベルクに参集し，総統を囲み，ハイルを歓呼した。それに応えて総統は荘厳にして誇り高い言葉で，ドイツの農民身分を国家の大黒柱にしてドイツ生命の源泉として信奉を表明した。その神聖なひとときは，そこに居合わせることができたすべての者にとって，崇高な忘れがたい体験となった。ビュッケベルクは，この日曜には，ドイツ国家（ライヒ）の中心であった。ニーダーザクセンの人々は，幾多の自由の闘士を生み，また忘れがたいホルスト・ヴェッセルも輩出した自分たちの気高いふるさとが大規模な農民集会の会場に選ばれ，それゆえ世界が注目したことを誇りにしている。

塔という塔からこの日を知らせる鐘が喜ばしくも荘厳に鳴りわたった。ドイツの農民は，喜びと感謝の気持ちで教会堂にあつまった。収穫感謝祭！至るところに色とりどりの収穫の輪が微笑んでいる。黄金色の重い穀穂の束がシンボルとして街路に飾られている。ショーウィンドのケースにも，教会堂の祭壇にも，畑の作物や果樹園でとれた果実が載っている。上古の儀礼と行事がふたたび目覚めた。万物の創造主にたいする感謝が沸き上がる。全能者の賜物への賛辞が喜ばしく響きわたる。それはまたドイツの国土とフォルクの国民を再び護ろうとする深奥の願いとむすびついた。ここ，ヴェーザー地方のまんなか，幾多の伝説とできごとの場所で，何万という人々が，北方のルーン文字を印した赤色旗を見つめる。*ハーケンクロイツ*，新たな時代の太陽のしるしである。（略）

各地の催し

ドイツ全土の都市で，午前中から収穫感謝祭が催された。多くの場所で人々は拡声器の周りに集まって，午後にはそれぞれの地域のリーダーの演説に集まり，続いてビュッケベルクの大農民集会からのラジオの中継に耳を傾けた。

ケルン

ここではかつてないほどの祭りの光景が繰り広げられた。盛大な祭りの行列が街路を行進した。早朝から近隣の職業組合や公務員が制服あるいは民俗衣装を着け，行列を作って町へ入ってきた。行列の先頭にはそれぞれの地域のリーダーが立った。オペラ座の前ではライン左岸の行列隊がパレードが行い，またアーヘン門では数千人が集会を開いた。

アーヘン

前夜の土曜日には地区の農業団体による農産物フェアが開催された。祭り当日のクライマックスとして市街を行列行進が行われ，それに教会堂開基祭が結合した。オイスキルヒェンと

デューレンでも同様の催しがおこなわれた。

ボン

ドイツ週間の最終日とも重なって盛大な収穫感謝祭が挙行された。夜にはアイフェルの山々，ライン河とその支流モーゼル川とラーン川に臨む山々にファイアストームの火が燃え上がった。

ハンブルク

農民ならびに農業と直接・間接に関係する各種の職業組合・官庁・団体・親睦会などが参加して盛大な行列が行われた。行列は8キロメートルの長さにに及んだ。ダイヒ門で農民と市民が一緒になって感謝のミサがおこなわれた。午後はフェストヴィーゼの動物園広場で大規模な農民集会が開かれ，カウフマン知事が血と土への信奉を表明した。

ポメルン郡

各地で祭儀ミサが執り行われ，地元の昔ながらの収穫感謝の行事が見直されることになった。シュテッティンでは民俗衣装の人々による行列があり，締めくくりはパレード広場で大集会で，それには国防軍と保安警察も参加した。祝賀演説は，ポメルンの州同盟議長シェーンベック党員がおこなった。

ヴッパータール

集会では，東プロイセンの州長官コッホが演説をした。彼は，始めに，この日，彼自身の父の身分である農民の立場で語ることができる喜びを表明した。次いでコッホ党員はこう述べた。

東プロイセンの労働闘争は打ち砕かれた。それは人々が何年にもわたってナチストの教訓を受けた結果として，個別利害を抑え，ヒトラーを信じて全力を尽くすようになったからである。プロイセン的社会主義の東部が歴史の先頭に立つために，また百万人から百五十万人の人々が大移住計画によって東プロイセンへ居を移すことができるために，あらゆる前提条件がととのえられなければならない。ドイツのすべての働き手が2モルゲンから4モルゲンを所有することができるのも必須である。

国民の代表者のすべての方々の前でこう言わねばならない。ドイツが戦争に向けて軍備を進めているという言い方は虚偽である。ドイツは，その名誉と自由が認められるかぎり，平和の最強の保障である。6千万人に職場とパンの権利をもらさすのでない限り，中央ヨーロッパにはいかなる平穏もないことを，外国の経済界の指導者たちは知らなければならない。ドイツは，平和を保障する用意がある。しかしその国土が1平方メートルでも侵されるなら，手厳しく撥ね付けられるであろう。

ブレスラウ

正午にかけてシレジアの農民たちが豪華な収穫の山車を仕立てて城前広場に向かい，街路を練り歩いた。先頭はトランペット隊で，行列には第7騎兵連隊の第1中隊も加わった。さらに近隣の村の消防団が華やかに飾った車で多数参加した。そこにはドイツの果物や野菜を買うように主婦たちに呼びかける文言が掛っていた。教会堂の鐘の鳴りわたるなか，ニーダーシレジアの農業組合長シュナイダー＝エッカースドルフが農民に挨拶の言葉を述べた。また州長官ブリュックナーが第2騎兵師団司令長官フォン・クライスト将軍が収穫感謝祭に寄せてシレジアの農民に向ける祝辞を読み上げた。そのなかには，食料生産者と防衛者，全フォルクの破壊されない力の最強の表現として共通である，との文言があった。その後，州長官が演説をおこなった。

オーバーシレジア

この地域の国境地帯で祭りがおこなわれた。オーバーシレジアではなお広くおこなわれている民俗衣装を着用して人々は新しい祭りに参集した。なかでも労働者の町であるヒンデンブルクでの祭りは特筆すべきものであった。鉱山組合の大集会には1万5千人の鉱山労働者が参加した。第7歩兵連隊のオートバイ隊が隊列行進を行って，シレジア駐屯軍から，グライヴィッツ郡，ヒンデンブルク郡，ボイテン郡の農民に宛てた祝辞を持参した。祝辞には第2騎兵師司令部長官フォン・クライスト将軍の署名が記されていた。

ドレスデン

正午に，農民の装いによる大規模な行列が行われた。午後には，アドルフ・ヒトラー広場で大集会があった。

ケームニッツ

36万人の住民の20万人が収穫感謝祭の記念徽章を購入した。午後には町のあちこちで突撃隊と親衛隊が集まった。

ハレ

モーリッツブルクの歴史広間において祝賀会が行われた。参事会員にしてガウ・リーダーのヨルダンの挨拶のあと，バイエルンの文化大臣シェムが，アドルフ・ヒットラーを種播く人にたとえる講演をおこなった。

ミュンヒェン

バイエルン政府要人の参列のもとで，農民の高齢者を称える式典がおこなわれた。以前に賞

状を授けられた114人の高齢の農民が見守るなかで，新たに33人の高齢農民に感謝状がわたされた。

バイエルン首相ジーベルトが，高齢の農民たちを前に，彼らが私たちの民族体に与えてくれた賜物を感謝して祝辞をのべた。この日の大きな催し物として，バイエルンのすべてのガウから集まった1万9千人の民俗衣装の人々が全長3時間におよぶ行列をおこない，バイエルン政府の要人たちがナショナル・シアタの玄関階段でそれを見守った。またケーニヒスプラッツ（国王広場）の大集会では，大臣のヘルマン・エッサーが，フォルクストゥーム（民族体）と民俗慣習を称えて演説をした。フェルトヘルンハレでは，参列者が国民運動の犠牲者に花輪を捧げた。午後と夕方には，数万人の人々が今日最終日を迎えたオクトーバーフェスト（十月祭）に集まった。その期間中，国中からおびただしい人々があつまって収穫感謝の意味をもつフォルクの集いを繰り広げたのである。

シュトゥットガルト

午後，4つの行列が同時に市内からカンシュタットの広場にむけて行進をおこなった。広場では「アドルフ・ヒトラーの闘いの軌跡」という感動的な催しが行われ，国家指導者ムルが演説をした。

［特集第2面］

ライン各地でライン祭りと収穫感謝祭が催される

ドイチェ・エックでは国家指揮官アルフレート・ローゼンベルクが演説

ドイツ文化戦闘団は，収穫感謝祭とむすんでライン各地の町で文化行事をくりひろげた。町やガウの人々がライン河を舟で行き，それはコーブレンツでの盛大な集会になった。そして数万人を前にアルフレート・ローゼンベルクが演説をおこなった。

ドイツの皆さん，ドイツの若者たち。新しい国家はすでに多くの真摯で荘厳な祝日を祝ってきた。しかしそのなかで特別の2つの日があります。

ひとつは5月1日であり，もうひとつは10月1日であります。—略—

5月1日は過去数十年の歴史のなかでもっとも議論が多かった日のひとつであります。その日をめぐっては多くの国々で闘いが繰り広げられ，我がドイツでもほんの数年前までは激しい戦いの中心に位置していました。数年前まではプロレタリアートと市民がその日に闘っただけではなく，マルクス主義者運動のなかでも血みどろの闘いがなされたものです。

数年前の5月1日にはベルリンの路上でもすさまじい戦いになったものでした。

1933年になってこの日はまったく新しい意味を帯びることなりました。

（略）

世襲農地法

農民はドイツ的，アーリア的，気高くあらねばならない

ベルリン　10月2日

ドイツ法律家大会の審議が行われている間に，国家（ライヒ）政府は新しい世襲農地法を公布した。同法は国家（ライヒ）首相の他，法務大臣と農業大臣によって署名された。

この法律の解釈にとって重要なのは，法全体の原則を謳っている次の前文である。

ドイツ政府は，古来のドイツ的相続慣行を確認して，農民をドイツ・フォルクの血の源泉として維持することにつとめる。

農地は，恒久的に自由農民のあいだで血族（ジッペ）の相続財であるために，抵当や相続分割から保護されなければならない。

農業経営の規模が健全な大きさを保った分割になることが，その意図するところである。なぜなら圧倒的多数の活動的な中小農民が全国において等しい待遇をうけるべきであり，それはまたフォルクと国家を健全に保つ上での保障にほかならないのからである。

世襲農地法の基本思想

農林業の経営は規模の点では，その農地が仕事の能力をもつ者に属している場合には，最小では1自給農地面積，最大で125ヘクタールを以って世襲農地とされる。

世襲農地の所有者をもって農民（バウア）と称する。農民はドイツ市民でなければならず，またドイツ人の血によらなければならない。すなわち血統的に不変であり，ドイツ的にして気高くあらねばならない。

世襲農地は非世襲者に分割されてはならない。

世襲者の親族の権利は他の財産に限定される。非世襲者とされた子弟は，当該農家の資力に応じた職業訓練と支度を受ける。それらの者が罪なくして困窮する場合には，ふるさとに避難することが許される。

世襲農地権は死亡によって廃棄されることも制限されることもない。

世襲農地は原則として譲渡は不可であり質入れもしてはならない。

以上の原則から明らかなように，1933年5月15日のプロイセン世襲農地法が今回のドイツ世襲農地法のモデルとなっている。しかし新しい世襲農地法は，多くの個別問題においてそのモデルと異なっている。たとえば新法は，世襲農地が原則として

官庁によって世襲農地台帳に記載されるべきこと

を定めている。他方，プロイセン世襲農地法では，地域の世襲農地相続の慣習に委ねており，記録も農地所有者の申請によるものとしていた。またプロイセン世襲農地法では，所有農地面積について最高限度の規定を設けていなかった。しかし新法では，今後は125ヘクタールを超える例外については国家（ライヒ）食料大臣が特定の条件を満たした場合にのみ認めることになる。特に興味深いのは，次の厳密な規定である。

これより先ドイツにおいては，世襲農地の所有者だけが農民（バウアー）と呼ばれる。他の農地あるいは林業に使用されている地所の所有者ないしは占有者は農地主（ラントヴィルト）と称される。

農民の出自についても厳しい要請がなされている。父方あるいは母方のいずれかの祖先にユダヤ人ないしは有色人種の血が入っている者はドイツ人すなわち血統的に一貫した者とはなりえない。もとよりその調査には基準を設ける必要があり，1800年1月1日を以って起点とする。

さらにまた農民（バウアー）は気高くあらねばならない。すなわち農民はその農地を立派に経営する能力をもたなければならない。そのさい年齢的に成年に達していないという不足のみの場合は障害とはみなされない。しかし農民が気高さに乏しく，あるいは経営の能力を欠き，あるいは借金の返済についてそれが経営的に無理のないものであるにもかかわらずなされない場合には，世襲権裁判所は土地の農民指揮官の申請にもとづいて，その世襲農地を永久にあるいは一時的に当該農民の妻あるいは当該農民が死亡のさいに継承者となるべき者に委ねることができる。

正式の妻あるいは後継者が存在しない場合，あるいはこれらの者が農業経営の能力を欠く場合は，世襲権裁判所は，その世襲農地の所有権を，地域農民指揮官の申請により，農民指揮官が適切と認めた者に委ねることができる。なお適当な親族が存在する場合は，農民指揮官はその者のなかから推薦すべきものとす。

相続人がすでに世襲農地を持つ場合は，その者は，それにもかかわらず，割り当てられた世襲農地を担当することができる。それゆえ相続人は交替することができる。なお被相続人は，相続人がその名前に加えて農地の名称を名乗るべき旨の指示を常に行うことができる。

世襲農地の譲渡あるいは質入れ

これらは，重大な理由が伴い，世襲権裁判所の同意を得た場合にのみ認められる。しかし世襲農地はその執行にたいしては保護される。世襲農地において収穫された農作物も，それが農地付属物の一部であるか，あるいは農民ないしはその家族が次の収穫までに必要とするものである場合は，強制執行から保護される。

150 ライヒスマルクを超える債権において，地区農業指揮官は国家（ライヒ）農業者団体から負託された場合には，債務を国家（ライヒ）農業者団体に移管することができ，国家（ライヒ）農業者団体が債権者となる。世襲農地の収穫物にたいする強制執行は税金あるいはその他の公的かつ法的な金銭債権

に限定される旨の執行規定が公布されており，それゆえ私的な債権者は，世襲農地およびその収穫物を差し押さえることはできない。

世襲権裁判所の決定に対抗して，判事を議長とする世襲農地裁判所に控訴することは許される。最高審は国家（ライヒ）世襲農地裁判所がそれに当たり，これについては規定が定められる運びである。世襲農地台帳および土地台帳への記載は無料である。特に重要なのは，世襲相続人が世襲相続税や地所取得税を払う必要がないことである。

国家（ライヒ）世襲農地法は，1933年10月1日以後に発生するすべての相続案件にたいして適用される。同時に，農民法の規定，したがってプロイセン世襲農地も効力を失う。

［ドイツ文学の歴史における農民］　省略

［ドイツの植民地作家］　省略

(3) ナチス・ドイツの収穫感謝祭の構造・背景・注目すべき諸点

ナチ党の機関紙において行事の実際をたしかめた。これを踏まえて，次にこの一大イヴェントの輪郭，すなわち行事の構造・背景および注目すべき諸点について検討を加える。

[1] 推進者，および現実の核としての農業政策

この大規模な儀式を実現させたナチ党政権のなかの推進者が具体的には誰であったか，またどの組織であったかという問題がある。新聞記事の体裁からも推測できることであるが，中心的な推進者が食料農業大臣リヒァルト・ヴァルター・ダレーであったことは疑えない。ナチ党幹部のなかで農業政策にともかくも専門的な知識とヴィジョン（そしてイデオロギー）をもっていたのは，ダレーであった。彼はすでにヴァイマル時代末期にプロイセンと共和国の農業相をつとめたことがあった。しかしその政策構想やイデオロギーが受け入れられなかったために下野していたところを，ナチ政権によって1933年6月に食料農業相に起用されたのであった。

ヴァイマル共和国末期の経済的な混迷のなかで農民の窮迫状態は極限にまで達しており，政権獲得直後のナチ党にとっても，事態を早急に改善する必要があった。事実，ダレーの政策によって一時的には問題が解決されたところもあった。担当大臣への就任から3か月足らずで，食料管理機構の設置法（9月13日）と世襲農地法（9月29日）の2法案を成立させて，ナチ党政権前半の国の農業と食料管理の根幹になる制度と組織に向けて舵を切ったことをみると，有能なテクノクラートであったと言えよう。農民にとっては，前者によって生産物が安定的に国に買い付けられるようになり，また後者によって農地が抵当化して失われる危険が防止され分割相続による細分化も免れることになった。したがって農地のあつかいについては，一

種の国有化に向かう政策という側面をもっていた。これらによる農民の地位の（一時的なものであったにせよ）安定は，他方では農民から資本主義的・近代的な意味での自由を奪うことでもあったが，ともかくもそれはひとつの政策であった。1933年の秋はこの新しい農業政策が開始したばかりで，農民の期待が非常に大きかった時期である。ちなみに一見たわいのない民俗現象であっても，そこには多くの場合何らかの利害関係がからんでおり，さらにそれを掘り下げてゆくと広い意味での法的根拠にぶつかることになる，と説いたのは，法制民俗学のカール＝ジギスムント・クラーマーであった。☆ 民俗行事の背後に一国の農業政策が核心を形作っているという点では，収穫感謝祭はそのモデル・ケースとさえ言えるのである。

注

☆ 次の方法論考を参照，Karl-Sigismund Kramer, *Grundriß einer rechtlichen Volkskunde. Gottingen* [Otto Schwartz] 1974.

[2] ナチ党の組織と権力関係

収穫感謝祭は，ダレーの農政が成功のうちに滑り出し，一般の期待も高まるなかで企画された。ナチ党政権にとっても上げ潮の時期であった。またダレーが企画を推進するにあたって，ナチ党の他の有力者と良好な関係を結んでいたことは，ナチ党の主立った実力者がこぞってビュッケベルクの会場に姿をみせるか，あるいはビュッケベルクの行事の写真版を各地で熱演していたことからもうかがえる。すなわち宣伝相ゲッベルス，文化政策の中心人物で党機関紙「フェルキッシャー・ベオバハター」の編集長でもあったアルフレート・ローゼンベルク，親衛隊長官ハインリヒ・ヒムラー，労働戦線議長ローベルト・ライ，国防相フォン・ブロムベルク，文化相ベルンハルト・ルストなどである。

なおここで民衆の大動員に力を発揮したのは基本的にはダレーの指揮下にあった「国家食料生産者団体」であろうが，この組織はこの時期にはなお整備に向かってうごいている最中であった。このイヴェントへの大動員も組織の整備を促進する上で弾みになったであろうが，そのメカニズムが整うのはこの年の年末以降である。またダレーのその組織は農民を対象にしており，都市民衆に及ぶものではなかったという点では，他の指導者たちの積極的な協力があったことは明らかであった。すなわちローベルト・ライの労働戦線，アルフレート・ローゼンベルクの「ナチス文化同盟」，そしてハインリヒ・ヒムラーの親衛隊である。これらはやがて血みどろな主導権争いを演じるようになるが，政権初期のこの時期にはまとまって行動していたのである。

[3] 民俗思想との関係 —〈農民〉という概念

この大規模なイヴェントと当時の民俗学と関係はどうなのであろうか。このイヴェントを成

り立たせている民俗学のモチーフは2つである。ひとつは〈農民〉とい概念の性格であり，もうひとつは〈収穫感謝祭〉という行事である。前者について言えば，ヒットラーはベルリンでの演説のなかで，〈ドイツ農民は，ひとつの身分（シュタント）ではない／ドイツの生命力の代表であり，それゆえドイツの未来の代表である／我々はドイツ農民にナショナルな豊饒力の源を見る／我々のナショナルな生き方の土台を見る〉と語っている。これは直接的にはダレーの見解であるが，またこの時点ではヒットラーもゲッベルスもローゼンベルクもその見解を受け入れていた。すなわち農民という職業や身分に社会の原理を見るという行き方である。これは国民経済における農業の意義を過大視するいわゆる農本主義などではなく，もっと理念的ないしは空想的な性格をもっていた。農民は階層や職業を越えた国民の生き方そのものであり，民族の本質でもあるという過剰な農民観である。ダレーはそのナチズム的形態であり，あるいはナチズムが多様な保守思想のアマルガムであったという意味では，そうした農民観を合併していたと言うこともできる。

射程を大きくとるなら，そうした農民観の遠い大きな背景としては，ヴィルヘルム・ハインリヒ・リールを挙げなければならない。リールは19世紀の後半に，同時代の社会を活写して，当時全盛であったグリム兄弟に発する神話学系統の民俗学を修正する方向に進んだ人として重くみられている。斬新な視角と膨らみのある文体，そして社会構成と歴史を手際よく整理する手腕によって長く多くの読者をひきつけた。しかしその反面，リールの原点は1848年の民衆蜂起に社会崩壊の危機をみたことにあり，またリールはそれを隠しもしなかった。リールの著作『市民社会論』は1851年に書かれながら20世紀に入ってますます愛読されることになったが，その冒頭の文言はこうである。〈ドイツ国民のなかには，決して覆されることのない保守的な力，すなわちいかなる変転にも抗して持続する確固たる核心がある — それは，我らが農民である〉。☆ リールは，1848年の動乱の記録として『ナッサウ年代記』を書いた。そこで飛び交ったパンフレットやビラまでを収録して民衆各層の動きを活写するなど，リールが三月革命を最も生産的に克服した一人であったことは疑う余地がないが，その克服の仕方は，二度とそうした転覆の危機を許してはならないという方向においてであった。そして発見したのが，〈たとえ丸裸にされても最後まで王冠を支えつづける恒常的にして不撓不屈の身分としての農民〉であった。このとき，ドイツ思想界において，農民は，実態とかけはなれた究極の人間集団のイメージへの道を歩みはじめたのであった。同時代の誰よりもリアルに生活者の姿を描くことができたリールは，同時に非現実的な社会構成を夢想する人々の元祖でもあったのである。☆☆

しかしリールとナチズムとのあいだは一直線ではなく，そのあいだに幾らも岐路のチャンスがあった。また連結線を想定したばあいでも多彩な媒介項が存在した。リールがナチズムの源流であった考えるのは短絡と言わなければならない。そして媒介項のなかで最も凶々しいものが，人種理論であった。さらに言えば，最後はゲルマン人至上主義にいたるその淵源が，

変わり種のフランス人とイギリス人であったことは歴史の皮肉であろう。ジョゼフ・アルチュール・ド・ゴビノーとヒューストン・スチュアート・チェンバレインである。そしてその申し子にして，文才においては劣等生，しかし不思議に時代の寵児となったのが自然科学出身のハンス・K・ギュンターであった。その一人よがりの人種論が一声を風靡するに至っては，農民存在の過剰な称揚とアーリア人種至上論が結合するのは時間の問題であった。その役回りを演じたのがナチストの農政家リヒァルト・ヴァルター・ダレーであった。

注

☆ Wilhelm Heinrich Riehl, *Die bürgerliche Gesellschaft*. 1951. リールのこの著作は何度も復刻されているが，ここではハンス・ナウマンがレクラム社から刊行した次を挙げる，Wilhelm Heinrich Riehl, *Die Naturgeschichte des deutschen Volkes*. In Auswahl herausgegben und eingeleitet von Prof. Dr. Hans Naumann und Dr. Rolf Haller. Leipzig [Philipp Reclam jun.] 1934, .165–320.

☆☆ リールに批判的な評価をおこなっているヴェーバー＝ケラーマンの見解を採用した，cf. Ingeborg Weber-Kellermann u. Andreas C. Bimmer, *Einführung in die Volkskunde. Europäische Ethnologie*. Stuttgart [Mezler: Sammlulng Metzler 79] 1985, Kap. V.

[4] 背景としての民俗学 — 収穫行事を特別視してきた系譜

収穫感謝祭（Erntedankfest）という祭儀はさておいて，その基礎にあるのは収穫（主に麦類）にちなんで農民のあいだで伝承されたきた民俗行事，すなわち収穫行事（Erntebrauch）である。[1] その収穫行事が伝承の一類型であることは疑えない。問題は，民俗文化における位置と比重の程度である。穀物が主食である以上，その収穫の行事が一定の重みをもつことは当然であるが，さりとて格段に大きな意義をもつというものではなかった。というより穀物を祝う祭儀は他に大きなものがあったのである。その筆頭に挙げるべきは聖体大祝日である。すなわちキリストの屍体とパンの一致の神秘を核にした教会の祭儀である。これは小麦の収穫を目前にした祭儀で，カレンダー上では6月に到来する年が多い（移動祝日で，聖三位一体の主日［＝聖霊降臨の主日の次の日曜］の後の木曜）。この祝日はキリスト教会の重要な祭礼のなかでは，むしろ後世になって形成され，起源はようやく中世後期あるが，特に近世になって大祭礼に発展した。[2] また西ヨーロッパ全域を通じて統一的であることを骨子とする教会祭儀においても，その都度その都度の世相動向を教会の側からまとめてゆく指向は常にはたらいてきたところから，やや地方的なものや一時的な流行に終わったものまで含めれば，農業に関係した教会祭礼や教会慣習は非常に多彩であった。主にドイツ語圏でおこなわれている〈三本の穀穂の日〉，あるいは葡萄栽培にちなむ〈葡萄搾取者キリストの日〉などがそうである。教会暦は同時に農事暦の性格ももっていたのである。

ところが19世紀のロマン派の民俗学においては，キリスト教的な色合いをできるだけ排除して民間習俗を理解しようとする志向が強まった。そしてそのときの最大のテーマが収穫行

事であった。それをおこなったのは，グリム兄弟の弟子のひとりで，兄弟の神話研究の流れを民俗学として成立させたヴィルヘルム・マンハルト（1831–1880）であった。しかも収穫行事はその終生にわたって取り組んだ材料であった。マンハルトは原初の神話の復元というグリム兄弟の構想を受け継いで，その具体的な作業の手がかりを収穫行事のさいに農村でおこなわれる特定の行為や文物にみとめたのであった。特に収穫の最後に残った麦の穂ををめぐる俗信には原初（キリスト教以前の）の宗教がその名残をとどめているとの着想を得，それを1865年に発表するとともに，同年にはヨーロッパ各国に1万5千通のアンケートを発送して大規模な実態調査を進めていった。また文献的な裏付けにも精力をそそぎ，それをライフワークの『森と畑の信奉』2巻（1875/77）に結実させた。[3] この著作が19世紀のドイツ民俗学の金字塔であること疑いようがない。膨大な文献資料の堀り起こし，それらをゲルマニストとしての修練を経た人ならではの良心的で批判的な姿勢を保ちつつこなしていった。また神話観や，ドイツ以外の他の民族の文化遺産にたいする観点などにおいても，傑出したものがあった。しかし収穫行事に原初の宗教や神話的思考をみるというテーマ自体は今日では疑問視されており，1930年代以来，各国で批判が起きている。

しかし19世紀末から20世紀にかけてのネオロマン派の思潮のなかでは，マンハルトの理論はヨーロッパ各国で歓迎を受け，その観点を踏襲した夥しい民俗採集や類似の意味付けを流行させた。いわゆるマンハルディアン（マンハルト流の人々）で，ドイツでは19世紀の末にウルリッヒ・ヤーンを始め多数がおり[4]，またドイツ以外ではジェームズ・ジョージ・フレイザー（1854–1941）が大きな存在となった。フレイザーの大著『金枝篇』[5]は歴史的な位置や脈絡とは関わりなく読み物として日本でも受容されているが，学史的にはマンハルトの民俗学を土台にし，そこに文化人類学の視点を加えて途方もない規模にふくらませたものと言うことができる。

かくして19世紀末からは民俗学における年中行事の解説では，収穫行事にかなりの比重をおき，またそれを教会儀礼と切り離して理解するのが一般化した。たとえば膨大な資料を盛り込んで今日なお指標的な位置にあるパウル・ザルトーリの『儀礼と行事』がそうである。[6] しかし他方，重要な民俗記録とされているものでも，マンハルトと同時代人まで溯ると，そうした種類の観察はほとんど見当たらないのである。たとえば19世紀後半にベーメンの農村部の年中行事を記録したイーダ・フォン・ラインスベルク＝デューリングスフェルトである。[7] また下って戦後の研究をみると，グスタフ・グーギッツの『オーストリアの年中行事と祭礼暦』では，収穫行事はキリスト教会を中心に展開する多様な宗教習俗のなかに分散しており，収穫行事としてまとまったキリスト教会の外部の祭典はあげられていない。[8] それが実際の姿なのである。

注

1) 19世紀の収穫行事の実態については次を参照，Ingeborg Wegber-Kellermann, *Erntebrauch in der ländlichen Arbeitswelt des 19. Jahrhunderts, auf Grund der Mannhardtbefragung in Deutschland von 1865.* Marburg [N. G. Elwert] 1965.

2) 例えば次を参照，レーオポルト・クレッツェンバッハー『民衆バロックと郷土』（河野眞訳）名古屋大学出版会 1988, p. 185～203「御聖体の日の花輪行列」

3) Wilhelm Mannhardt, *Wald und Feldkulte.* 2 Bde. 1875/77.

4) Ulrich Jahn, *Die deutsche Opferbräuche bei Ackerbau und Viehzucht.* Breslau 1884 (Germanische Abhandllungen, Bd. 3).

5) James George Frazer, *The Golden Bough.* 初版は1890. 次の簡約版を参照，フレイザー『金枝篇』岩波文庫（永橋卓介訳）第1版 1951～52

6) Paul Sartori, *Sitte und Brauch.* Leipzig 1910/1911/1914, Bd. 2 S. 71–110.

7) Ida von Reinsberg-Düringsfeld, *Festkalender aus Böhmen.* S. 350.

8) Gustav Gugitz, *Das Jahr und seine Feste im Volksbrauch Österreichs. Studen zur Volkskunde.* Wien [Brüder Hollinek] 1949/50.

[5] キリスト教会との関係

新聞の報道において注目すべきことがらのひとつは，そこに，収穫感謝祭とキリスト教会との関係が見え隠れしていることである。すなわちアーヘンやボンでは収穫感謝祭は秋季に多い教会堂献堂祭（開基祭）と合同でおこなわれた。またハンブルクやポツダムでも先ず午前中に教会堂でミサが執り行われ，人々はその後でナチスの企画した収穫感謝祭に参加したと記されている。他の場所でも類似の動きがあったとみてよいであろう。これからもうかがえるように，1933年の時点では，ナチス・ドイツとキリスト教会とはそれほど対立的ではなかった。民衆が教会の祭儀に参加することを党機関紙は制止していず，またそのイヴェントにはキリスト教会の行事に取って代わるという意図も強くはみられない。ちなみにナチス・ドイツはその後，戦争による緊張が高まるなかで，キリスト教会に対抗して一種の宗教性を指向し，またキリスト教会の祭式カレンダーに代わる一連の祭儀を組織するような動きを見せるようなってゆく。

ともあれ教会堂において収穫感謝祭がおこなわれていたわけであるが，これはどういう性格ものであろうか。実は，収穫感謝祭が伝統的に受け継がれてきたのは，教会においてであった。しかしこれまたまたそれはキリスト教会の正式の祭儀ではなかった。教会堂における民衆祭礼であった。したがって「ミサ典書」にも，それぞれの教会堂の個別の付録などを除けば，普通は上ってこない。そういう雑多で地方色も帯びた行事のほとんどは18世紀後半に迷信として払拭されていったが，生活や生業の現実とのつながりのあるのものはなお継続していた場合があった。収穫感謝祭もそのひとつである。しかし決してそれは大規模な祭りではなかった。むしろ細々とおこなわれているのを19世紀の民俗学関係者たちが注目したのである。

実は今日でも教会堂では収穫感謝祭が行なわれている。農産物を色とりどりに祭壇や教会堂の床に盛り付けたり飾ったりするのである。その飾り付けの豪華なことで知られ，各地から観光客が集まる教会堂もある。しかしこれにも少し注意を要する。というのはナチスが大規模に収穫感謝祭をおこなったことに対抗して，1930年代後半に今度はキリスト教会の側が〈キリスト教的な収穫感謝祭のあり方〉を工夫するという動きが起きたからである。その過程では飾り付けや演出の仕方を解説したパンフレットも配布された。[1] 今日の教会堂の儀式はその頃の指示を起点にしていたり，そこで改変された場合が少なくないのである。

なお付言すると，今日のドイツでも収穫感謝祭は行なわれている。すなわち教会堂献堂祭における農作物を飾り付け，農産物の品評，あるいはパンの祭りなどである。後者で言えば，パンをそのときどきの時事的な話題に合わせた形（話題になっている建物やスペースシャトルや恐竜など）に作ったり，新しい配合による健康食を披露したりといったものである。

1） キリスト教会の側がナチスに対抗して収穫感謝祭を企画したことについては，当時，民俗学の分野でカトリック教会の代表者として渦中にあったゲオルク・シュライバーの次の著作を参照，Georg Schreiber, *Deutsche Bauernfrömmigkeit in volkskundlicher Sicht.* (Forshungen zur Volkskunde, Heft 29) Düsseldorf 1936, S. 85. この個所ではカトリック教会の収穫感謝祭の一環として宗教劇（Erntefestspiel）も創作されたことへの言及がある。cf. (Pfarrer) Th. Kluken, *Kirchliches Erntespiel.* Recklinghausen 1935.

[6] ナチス・ドイツの収穫感謝祭のその後の行方

ここでは1933年の事例に限って紹介した。できれば1934年の事例を合わせて観察するのがベターであったとの反省もあるが，ともかくもイヴェントの実際をできるだけ具体的に追ったのである。もとよりナチ党の機関紙の報道だけでなく，当時の参加者やその状況に批判的にかかわった人々の記録があればそれに越したことがなかったが，残念ながらその種のドキュメントに行き当たらなかった。これは今後の課題である。

ところでこのイヴェントがその後どう推移したかについて，簡単にふれておきたい。1934年は1933年と同じ位の熱意と規模でナチスはこれを実行した。1935年以降も挙行されたが，規模はさすがに縮小気味になった。縮小していった要因のひとつは，ナチ党のなかでのダレーの地位や影響力が衰えていったことにある。これはダレーの農政のメッキが剥げてきたのと，その政治姿勢がナチ党の膨張政策と齟齬をきたすようになったためである。ダレーの〈血と土〉のイデオロギーばその人種偏重やユダヤ人排斥によって紛れもなくナチズムであるが，その反面ドイツ人の伝統的な居住地の外に農民を移住させることにたいしては慎重であった。それもあってナチ党の基本政策が東欧・ロシアを射程においた戦争準備に向かうなかで，ダレーとその組織は，対外膨張策に突き進むヒムラーなどに圧迫されていった（なおダレーは1942年に農業大臣を解任された。ダレーがナチ党幹部のなかでは珍しく極刑を免れ，ニュルンベルク裁判でも7年の禁固刑にとどまって死に至る3年間は自由を得たのは，そうした事情が関

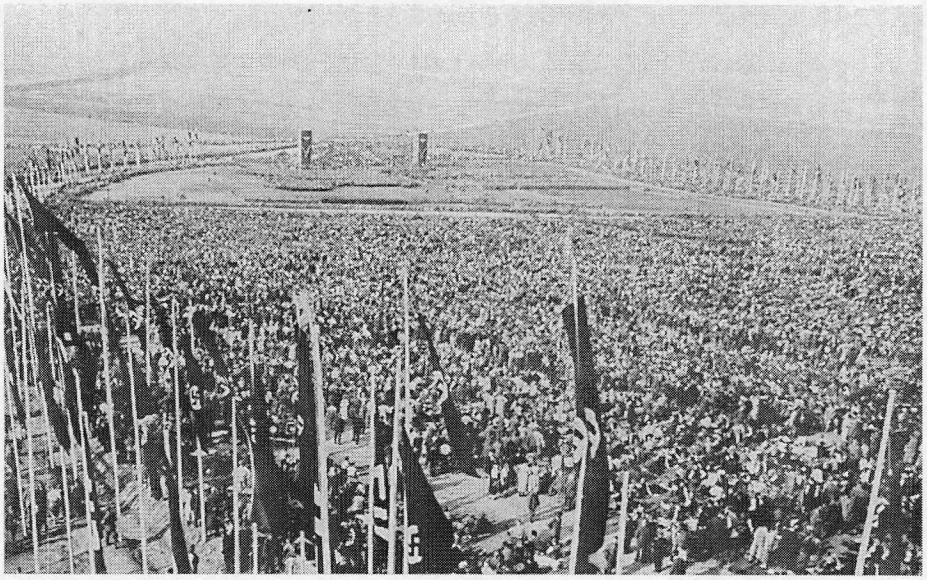
係しているのであろう。）ともあれ両者の確執は1936年頃から次第に激化し，1938年にはかなり深刻な状況になっていた。そうした内部対立もあって1938年はまともにイヴェントを開催できたかどうか怪しかったとも推測されるが，この年の夏から秋にかけては，それを吹き飛ばすような国際的な係争が持ち上がった。ヒトラーがチェコスロヴァキアのズデーテン地方を武力併合する賭けに出たところ，イギリス首相ネヴィル・チェンバレインが妥協してしまい，ナチスは外交において望外の大成功を収めたのである。そのミュンヒェン会談と平行して，10月初旬にドイツ軍はズデーテン地方へ進駐した。こうした推移のなかで，すでに農民への感謝というナチス・ドイツ的な意味付けをされていた〈収穫感謝祭〉は，一転して〈総統への感謝〉という一大キャンペーンに切り替えられたのである。

そして翌1939年の9月1日にドイツ軍はポーランドに進撃し，9月3日にはイギリス船を攻撃して第二次世界大戦が始まった。それゆえその年はイヴェントどころではなかった。しかし戦争が長期化の様相を見せ，国内の結集と思想統一の必要性が増すなかで，収穫感謝祭はあらためて見直された。この頃になるとアルフレート・ローゼンベルクが率いるいわゆる「ローゼンベルク機関」が民俗学の関係者をかかえることに成功していた。民俗学に進出したナチスの組織には，この他に親衛隊長官ハインリヒ・ヒムラーに属する「祖先の遺産」があり，2つの組織は激しい勢力争いを演じることになる。それらに属する民俗学の関係者たちは，差違や思惑や事情はそれぞれに異なりながらも，ナチ政権の国民結集政策に荷担していった。それらによってナチス・ドイツ後半期の民俗学や民俗イヴェントは独特の様相を呈するようになるが，その一環として収穫感謝祭も継続されたいった。1940年代に入ると，収穫感謝祭はローゼンベルク機関が推進するようになった。場所もベルリンが中心になり，祭典の当日には全国の農民の功労者を顕彰することが主眼とされた。1943年と1944年のベルリンでの祭典をゲッベルスとローゼンベルクが主に担当したのは，かかる推移の故であった。

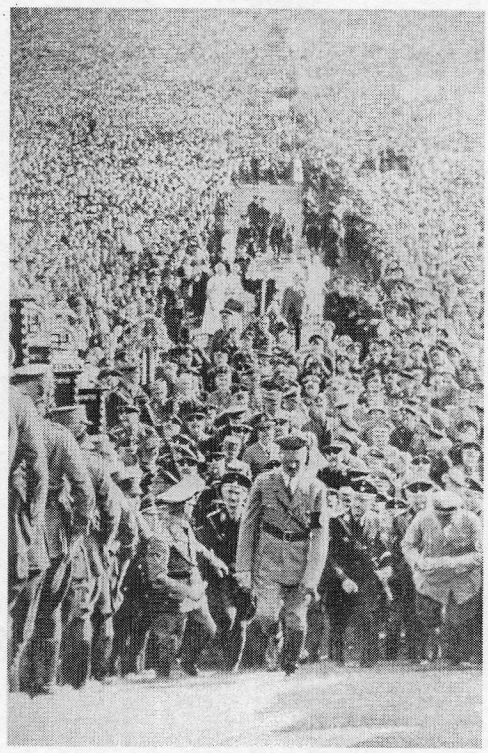
なおナチ政権末期の動向について言い添えれば，ナチスが政権を獲得した頃に高等教育を受けていた若い世代のなかには，ナチズムにまったく染まっていった人々が少なくなかった。一般的にもナチ体制の12年間には，前代を経験している年配の世代が時流に妥協した迎合者であったのにたいして，ナチスの上昇過程で成人した世代は熱狂的な体制支持者になっていったと指摘されている。民俗学の分野でもそうした現象がみとめられる。1940年代に入ると，戦況の不利にもかかわらず，才気煥発でありながら馬車馬のように視野の狭い攻撃的な若者たちが活躍するようになる。元はプロテスタント神学生で民俗学を専攻した「ナチス月報」主幹マテス・ツィークラーやローゼンベルク機関に属して各地の民俗イヴェントの指導に奔走したDr. ハンス・シュトローベルなどである。これらの人々は，民間習俗の非キリスト教的要素を強調し，またその方向の行事を普及させようとして遮二無二活動をおこなった。ナチス・ドイツを反キリスト教会の側面に過度に引き寄せて解釈するのは問題であるが，政権末期に青年たちのなかにはその方向への突進がみられたことも事実であった。これは閉鎖社会のな

かの世代的な問題としても興味ををそそるものがある。

ここでは特定の民俗イヴェントに焦点を合わせて，その実際を追ってみた。まことに，ナチス・ドイツという現代史のひとこまは，地球上のわずかな一角でのできごとであることを超えて，今なお観察し分析するに値する多くのデータが埋まっている実験場の跡なのである。



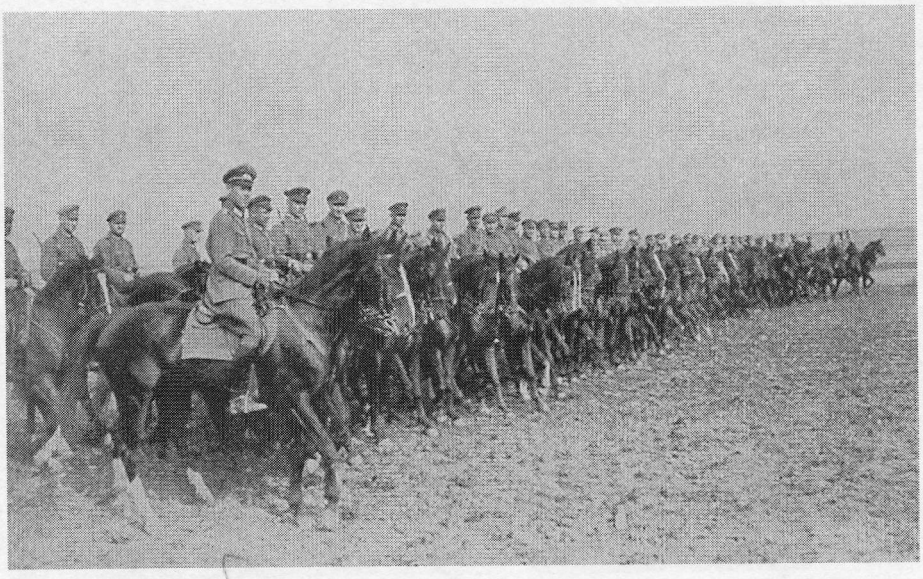
ビュッケベルクの大農民集会



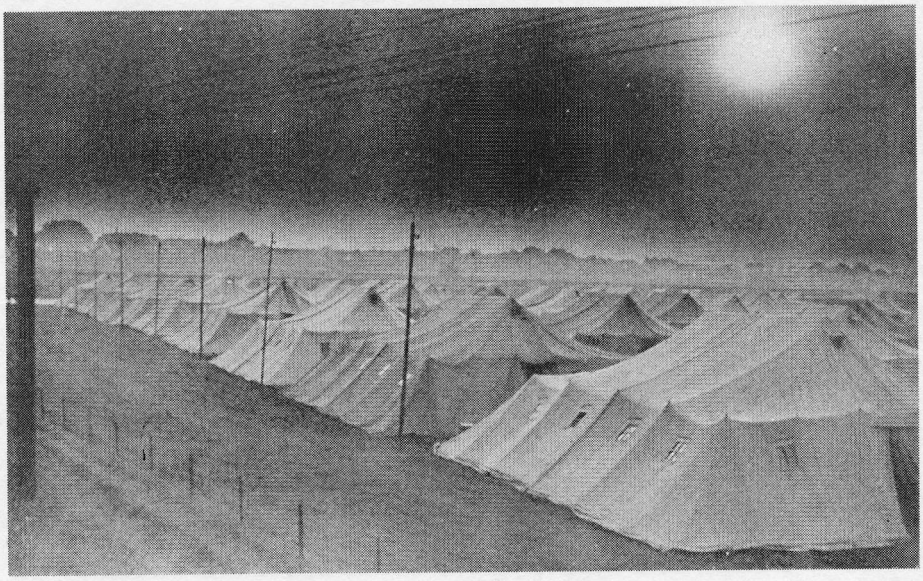
ビュッケベルクを上るヒトラー

実りの籠を携え民族衣装でビュッケベルクに集ったヴェーザー地方の農婦たち

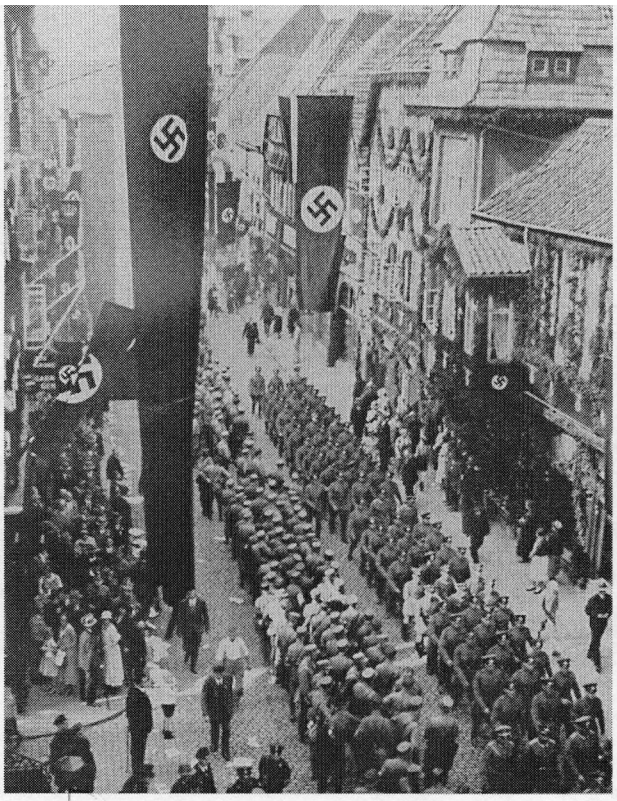
ビュッケベルクで歓呼の中を演壇に進むヒトラー



ビュッケベルクで演技を披露する国防軍騎兵連隊



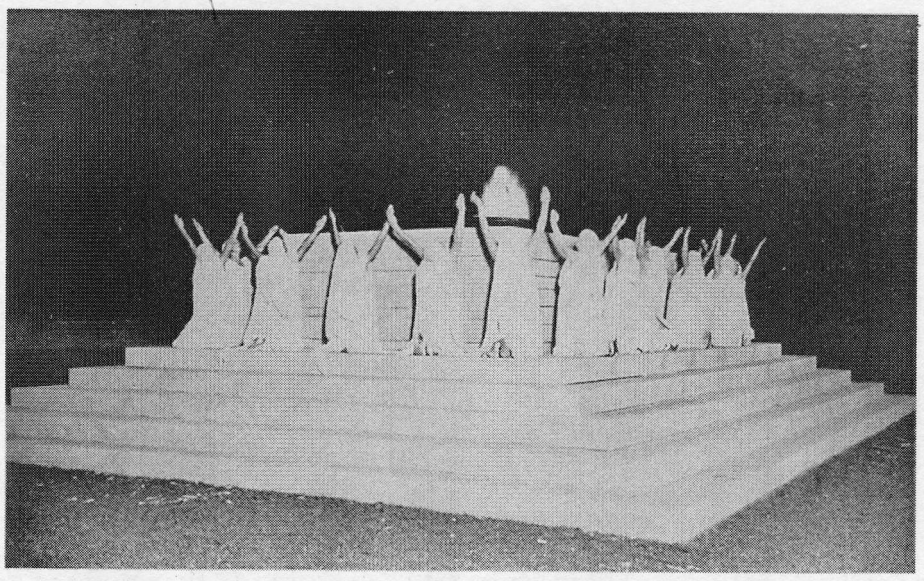
大農民集会を前にハーメルン近郊に出現した夜営の大テント村



大農民集会当日のハーメルン市街

大農民集会の前夜におこなわれたハーメルンの笛吹き男の再現行事

ベルリンのブランデンブルク門における収穫感謝祭



収穫感謝祭の夜，ベルリンのシュタディオンで上演された祝祭劇「パンと鉄」の一場面